「男に馴らひにし御心」考

―『とりかへばや物語』における「抑圧される女の生」をめぐって―

岡田　香織

序

『とりかへばや物語』は、左大臣のもとに男性として優れた資質を持つ女児と、女性として優れた資質を持つ男児が生まれ、成長後、女児は男性を装って、男児は女性を装って宮中に出仕する物語である。中盤以降では、女君が友人である宰相中将によって懐妊させられたことをきっかけに、男性装であった女君が女姿に、女性装であった男君が男姿となり、秘密裏に入れ替わる。二人は順調にそれぞれの役目を果たし、やがて女君は帝の寵愛を得て最終的に中宮にまでのぼりつめる。

当時において、男の訪れをただ待つことしかできない状況から脱出し得ず、耐えるほかない女の身の生きづらさは、『源氏物語』の紫の上や宇治中の君などに顕著に見られてきた。

女ばかり、身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし、もののあはれ、をりをかしきことをも見知らぬさまにひき入り沈みなどすれば、何につけてか、世の経るはえばえしさも、常なき世のつれづれをも慰むべきぞは、おほかたものの心を知らず、言ふかひなき者にならひたらむも、生ほしたてけむ親も、いと口惜しかるべきものにはあらずや、心にのみ籠めて、無言太子とか、小法師ばらの悲しきことにする昔のたとひのやうに、あしき事よき事を思ひ知りながら埋もれなむも言ふかひなし、わが心ながらも、よきほどにはいかでたもつべきぞ　（夕霧　④四五六）

夕霧巻において紫の上は、主体性を持つことをよしとされず、男にすがって生きていくことしかできない女の生の痛ましさについて考える。紫の上はその状況を打ち破ることもできないまま、その生を終えた。一方、そのように抑圧された生活を送らねばならないことに耐えがたさを感じた女君は、自らの苦悩の根源たる宰相中将のもとから脱出す

るという、従来の女性たちとは異なる行動を取ったことで現状を打破し、かつ中宮にまでのぼりつめる。女君が脱出を実現させられたのは、女君に男として生きた経験があったからこそであると作中で語られることから、新居和美氏(1)は、

女君は男装して過ごすという、普通の姫君にはない体験をしたために、一般貴族女性では持ち得ない「男にならひにし御心」を手に入れるに至った。その「男にならひにし御心」は、今までの平安時代の「物語」中の女性達が持ち得なかったものである。『とりかへばや物語』の作者は、女君をそれまでの「物語」にはない、新しいタイプの女性として描くために、「男にならひにし御心」を女君に与えたのである。そして、その「男にならひにし御心」はその後の女君の判断・行動を支える要因の一つとなり、女君は自分の未来を切り拓いていく「力」を得たのであった。

と述べている。また、西本寮子氏(2)が、

女性時代では、幸福を手に入れる過程が描かれることになる。別の言い方をすれば、獲得した「心強さ」が女性としての幸福の貫徹に生かされていく時代と言えよう

三谷亜紀氏(3)が、

帝の寵愛を独占し、国母にまで栄達できたのも、女君の、他の女性にはないこの「道〳〵し」さが他の人々を魅了したからだといえよう

と述べているように、女君が中宮にまでのぼりつめたのも「男に馴らひにし御心」によるものであり、それがあったからこそ女君は女性としての幸福を掴んだのだとされてきた。しかし、後述するように、宇治脱出前後に六例見られる「男に馴らひにし御心」は、女君と男君の入れ替わり完了後から、物語において一切用いられなくなる。栄華を極めたはずの女君にこの表現が用いられなくなったことの意味を、改めて考える必要があるのではないだろうか。本稿では、物語終盤における「男に馴らひにし御心」について検討するため、第一章では女君と『源氏物語』の女性たちを比較することで女君の特質を明らかにし、この物語の作者の意図を考える。続く第二章では、「男に馴らひにし御心」表現の消失について「光」表現から見ていくことで、表現の消失が何を意味するのか、第三章では、第一章で考えた作者の「意図」が、作品全体にどのような影響を及ぼしているか見ていきたい。

なお、本稿ではこの男女きょうだいの呼称を身体の性に準じ、身体上は女性でありながら男性と偽って出仕する女を「女君」、身体上は男性でありながら女性と偽って女春宮に仕える男を「男君」とする。また、物語上においてどちらが年長であるかの記載が見られないため、「兄妹」も

しくは「姉弟」ではなく、「きょうだい」と表記する。

一　女君の「心強さ」の特質と作者の意図

『とりかへばや物語』の女君は、幼い頃から活発で男児に交じって走り回り、管弦や歌、読経や漢詩に優れた才覚を発揮していたため、左大臣家を訪れる人々に男児であると誤認されていた。やがて世間に評判が流れ、極めて優れた男児がいることを聞きつけた帝に出仕を要請されると、父左大臣は懸命に自分を納得させ、娘の元服の儀を執り行い、男性官人として出仕させたばかりか、右大臣家の四の君と結婚までさせる。男性官人として出仕し始めた女君は、女の身でありながら男性官人として宮仕えし、妻をもつ我が身の数奇さに苦悩しながらも、朝廷にて優れた才覚を申し分なく発揮していた。

しかし巻二において、かねてから女君のきょうだいである男君に思いを寄せていた友人の宰相中将に乱れ寄られ、実は女性であったことを知られてしまう。女君は宰相中将を懐柔することで秘密を暴露させないよう仕向けることを咄嗟に決意し、難を逃れるが、その後宰相中将の子を懐妊してしまった。そして出産のため、これまでの身分を捨てて宰相中将の宇治の邸に籠め据えられ、男の通いを待つだけの抑圧された生活を余儀なくされる。しかし女君の矜持は、浮気な男を待つしかない生活で才覚ある我が身をつまらなく沈淪させてしまうことを許さなかった。女君は自らを抑圧する状況から逃れるために、単身宇治から脱出することを決意し、しおらしい女性を演じて宰相中将を油断させ、出産した愛しい我が子への愛執を断ち、脱出を成功させた。そして尚侍として女春宮に仕えていた男君と入れ替わり、万事がうまく収まるよう見事に立ち回ったのである。

前述した『源氏物語』紫の上に代表されるように、逆境にあっても耐えるほかなかったこれまでの物語の女性たちとは異なり、『とりかへばや物語』の女君は自らの力でそれを打ち破っていった。女君がこのような当時の物語の女性たちには見られない特異性を持つと考えられることは、石埜敬子氏(4)が、

> さまざまな場面でわが身を嘆き進退に窮しつつも、『今とりかへばや』の女君は、男として生きた過去の経験で培われた自らの判断と責任において打開の道を選び取ってゆく。それはこれまでの物語の女君にはない強さであった。

立石和弘氏(5)が、

> 所与の性役割に同一化し、しがみつくのではなく、辛ければそこから抜け出す主体性の創造。結果、子を捨てるという痛みを味わうことになっても、拒絶と逃走を実現する意志。そこに、「籠め据ゑ」られる女性と

その主体性をめぐって、『とりかへばや』が提示した特異な女性像を見ておきたい。

と述べているように、従来の研究において指摘されてきた。しかしこの違い、すなわち石埜氏の述べるところの「これまでの物語の女君にはない強さ」とは、何によるものなのであろうか。前述した新居氏の論(6)では、それが「男に馴らひにし御心」、つまり男として生きた経験によるものであるとしている。そこで、『とりかへばや物語』の女君と当時の物語の女性たちとの差異を探るべく、「男に馴らひにし御心」、及び物語上で「男に馴らひにし御心」と共に用いられたり、類似した意味で使用されたりしている表現「心強さ」について次に見ていきたい。「心強さ」とは、①心を強く保っているさま（意志が堅い・我慢強い）、②気が強くて思いやりのないさま（情にほだされない・つれない）、③頼もしくて安心な気持であるさまを指す語(7)である。そのうち、女君に見られる「御心強さ」は「意志が堅い」、「情にほだされない」の意であると解される。女君の「男に馴らひにし御心」、「心強さ」、及びそれに類似する表現は、作中に六例見られる。

一例目は宰相中将のもとから脱出することを決意した場面に見られる。巻二において、宰相中将に乱れ寄られ妊娠するに至った男装の女君は、出産のため宰相中将の所有する宇治の邸に匿われ、男装を解き、女姿となる。

心のうちには、我をまたなく思はんだにありし有様にてはこよなしかし、ましてかくのみ心を分けられては何にかはせん、などぞ思へど、いかにもいかにもこのほどまではこの人を背き隔つべきにもあらずと、さは言へど男に馴らひにし御心はうち思ひとりて、やすらかなる気色を、いと思ふさまにめでたくうれしと思ふこと限りなし。（巻三　三三九）

宇治での生活の中で、男の通いを待つことしかできない女の身のつらさと、かつて宮中で並ぶ者のないほどの才覚を誇っていた我が身を、移り気の多い男の妻として沈淪させることの虚しさを痛感した女君は、宇治脱出を決意した。しかし女性であることを世間に知られてはならないため、出産するまでは宰相中将を頼るべきだと判断した女君は、境遇に不満があることを宰相中将に気取られないように振舞う。その的確な判断力と理性的な行動が、「男に馴らひにし御心」からくるものであると語られる。

二例目は、宇治脱出を決意した女君が我が子への未練に揺れる場面に見られる。出産した女君は、「若君をいとかなしげに思して常に抱き扱ひたまふ」（巻三　三六二）ほど我が子をかわいがっていたため、宇治を脱出するとすれば子を見捨てることになると苦悩していた。

若君引き具したまはんもいとあやしく、さりとて見捨てんこともいとかなしきに、思しわづらへど、親子の

御契り絶えぬものなれば、行きあひつつ見ぬやうにもあらじ、さばかりなりしわが身の、この児かなしとても、いとかく人げなくて、通はんをわづかに待ちとりて過ぐすべきかはと、なほ過ぎにし御心の名残強く思しとりて、さりげなくむつかしげなる反故ひき破り焼きなどしたまひて、若君を目離れず見たまふに、いみじくをかしげにて、やうやう物語り人の影まもりて笑みなどするを見るぞ、いみじうかなしかりける。

（巻三　三八〇）

しかし女君は、男性官人として誇らしく生きてきた自分が、子供への愛情ゆえに隠れ妻として男の通いを待つつまらない生活をするべきではないと結論を出す。愛しい我が子でさえ捨て置けるほどの強い意志を持ち得たことが「なほ過ぎにし御心の名残」、つまり男性として生きたという稀有な経験ゆえであると語られる。

三例目は、宇治脱出決行の夜の場面に見られる。

その暮れに、例の近き所におはしゐて、消息したまへれば、ありしやうに乳母の局に入れたてまつりて人の静まるを待つほど、上は胸静かならず心騒ぎして乳母にもかかる気色見えず、ただこの君をつとまもらへて、かきくらされ、かなしと人やりならず思すに、夜更けぬべし、人静まりぬればはじめのやうに入れたてまつりて、御消息聞こゆれば、心地も静かならずかき乱りて、「さは、これしばし」と抱き移させたまふに、おどろきてうち泣きたまへるを、うちまぼりつつ身を分けとどむる心地してゐざり出でたまふを、人は何よりも子の道の闇は思ひ返さるべきわざなるを、さこそ言へ、男にて馴らひたまへりける名残の心強さなりければなるべし。

（巻三　三八四）

通常の親の情としては子を見捨てていくことはできないところを、女君は自分が選んだことであるからと、身を引き裂かれる思いを抱きながらも最後まで決心を翻すことなく、とうとう宇治脱出を決行する。それを実現せしめたのが「男にて馴らひたまへりける名残の心強さ」である。

四例目は、女君の宇治脱出直後の場面に見られる。宇治にて女君の行方不明が明らかになり、宰相中将邸は大騒ぎになった。

若君のかかることやあらんとも知らず顔に何心なき御笑み顔を見るが、限りと思ひとぢむる世のほだしといとど捨てがたくあはれなるにも、あはれ、かかる人を見捨てたまひけん心強さこそ、思へどあさましく、ことわりはかへすがへす言ひやる方なく、胸くだけてくやしくいみじく、人の御つらさも限りなく思い知らる。

（巻三　三九二）

おろおろと悲しみに惑うばかりの宰相中将は、邸に残された若君の無邪気な笑顔を前にして、これほどいとおしく思

える我が子を見捨てられるほどの女君の気丈さに驚くばかりであった。宰相中将視点からの表現である。

五例目は、女君が尚侍として、男君が大将として入れ替わって出仕した直後の場面に見られる。男君が尚侍として出仕中に妊娠させてしまった女春宮の世話をするため、男君と入れ替わって出仕した女君は、そこで女春宮の女房である宮の宣旨から、女春宮の妊娠の不審について相談される。

言ふべき方なき心地して、とばかりものもたまはで思し続く。さは言へど男の御身にて馴らひたまひにし御心なれば、道々しくあるべきさまも思しまはされて、さりとて我さへ知らずと言はんも宮の御ためいとほしく、まことにとかくおはしまさんほども同じ心にこそはなど思して、我もうち泣きて、（中略）のたまふけはいも、月ごろにつゆ違ふことなし。まして人は、御容貌などまほに見たてまつることなく、つつましげにて御帳のうちにのみかしづかれてものしたまひし馴らひなれば、いかでか異人とは思はん。ただ昔の督の君と思ひて、心合はせて大将の君を導ききこえたまへると思ひ寄るに、月ごろ心ひとつにうはの空に思ひつるよりも力つきぬる心地して、そのほどの御こと、とやかくやと聞こえ合はするにも、過ぎにし方よりも道々しう、御けはいなどのただほのかに言続けてものたまはざりしを、聞き分くほどにものうちのたまへるも、愛敬づき聞かまほしきさまにいとをかし。

（巻四　四二三）

宮の宣旨に泣きつかれた女君は考えた末、女春宮や自分たちの立場に配慮しつつ、話の辻褄を合わせてこれまでの経緯を見事に説明し、その場を切り抜ける。これにより女君は入れ替わりが露見することもなく無事に尚侍として歩み始めるが、これを可能にしたのが「男の御身にて馴らひたまひにし御心」である。

六例目は、女君が宇治から姿をくらましたことを、時を経て宰相中将が思い返す場面に見られる。

宮の中納言は、月日に添へて、ただひたぶるに行方なく思はば、恋しかなしとさのみやおぼえまし、これは、さてもいかでか女び果てたまひにし身をあらため、あたらしく捨てがたき身といひながら、またさはなり返りたまふべき、我をこそ憂しつらしと見るかひなくも思し捨てめ、若君をさへ見ず知らじともて離れたまひけん御心強さも、いま一度聞こえ知らせまほしけれど、世人もいかにぞや隔て多かる仲に今は思へるに、ことぞとなくておはするあたりに立ち寄るべきやうもなし。

（巻四　四六七）

女君が尚侍として出仕し、帝に見初められて寵愛を受け、やがて身籠るほど時を経てもなお、いまだきょうだいの入

れ替わりに気付かず、大将として出仕している男君を男装した女君だと思い込んでいる宰相中将は、宇治から失踪した女君の、子を見捨てた気丈さをうらめしく思い返す。宰相中将視点からの表現であり、四例目に類似した用例である。

女君の「御心強さ」が発揮されるのは、男装解除後、宇治脱出の場面と、女春宮妊娠の事情を隠蔽する場面である。大変に強い意志を必要とする局面や、ともすれば男女の入れ替わりが露見しかねない局面を、女君はこの「御心強さ」によって巧みに切り抜けた。我が子への愛執の念を断ち、宰相中将のもとから逃れ得たのも、的確で理性的な判断力を持ち得たのも、「御心強さ」あってのことである。そして女君は男の訪れを待つだけのつまらない生活から脱し、順調に尚侍としての新しい人生を歩み始める。言わば人生の転換点を、「御心強さ」によって決定づけたのである。これにより女君は、前述した『源氏物語』の紫の上に代表される、男の訪れをただ待つだけの状況から脱出できず、耐えるほかない抑圧された女の身の生きづらさから、自らの力で脱出することが可能になった。すなわち、この「御心強さ」を持ったからこそ女君は逆境を切り抜けたといえるのである。

このような「心強さ」を持った女性は『とりかへばや物語』の女君だけではなく、先行する諸作品にも見られる。そのうち、登場する女性が多く、更に『とりかへばや物語』に多大な影響を与えていると考えられる『源氏物語』を以下に見ていきたい。

『源氏物語』において三十六例ある「心強さ」、及び「心強し」は、「意志が堅い」「我慢強い」「強情を張る」「情にほだされない」「情趣を解さない」ことに関連して用いられており、女性に関して使用されているのは二十例である。そのうち、『とりかへばや物語』の女君に通底し得ると考えられる、逆境を切り抜けようとする際、あるいは愛執の念を断とうとする際に発揮される「心強さ」九例について、以下に挙げていく。

まず、六条御息所である。賢木巻において、光源氏の訪れが絶えたことで、光源氏への断ちがたい愛執を振り捨てるべく、六条御息所は娘斎宮に同行して伊勢下向を決意する。

対面したまはんことをば、今さらにあるまじきことと女君も思す。人は心づきなしと思ひおきたまふこともあらむに、我はいますこし思ひ乱るることのまさるべきを、あいなしと心強く思すなるべし。

（賢木　②八三）

しかし、光源氏の野宮への来訪を受けると、その「心強さ」は揺らいだ。

悔しきこと多かれど、かひなければ、明けゆく空もは

したなうて出でたまふ、道のほどいと露けし。女もえ心強からず、なごりあはれにてながめたまふ。

（賢木　②八八）

伊勢下向を思いとどまるように説得する光源氏に御息所の決心は揺らぎ、夜が明けて去っていく光源氏に対する思いを断つことができない。結局、御息所は伊勢に下向するものの、生涯愛執の念を断つことはできず、死後も物の怪となって光源氏につきまとうこととなる。

次に、空蟬である。夕顔巻において、伊予介の妻であった空蟬は、忌み事のため紀伊守の邸に移っていたところを、方違えしてきた光源氏に乱れ寄られる。拒否はしたものの、強引に契りを結ばれた。その後は光源氏が小君を使って文を送ってきても無視し、寝所に侵入された際も薄衣を残して逃げ、最終的には夫に同行し伊予へ下る。

御使帰りにけれど、小君して小袿の御返りばかりは聞こえさせたり。

蟬の羽もたちかへてける夏衣かへすを見ても音はなかれけり

思へど、あやしう人に似ぬ心強さにてもふり離れぬるかなと思ひつづけたまふ。

（夕顔　①一九四）

空蟬の伊予下向に際し、普通の女には見られぬ「心強さ」で振り切っていったものだと光源氏が回想する際に、この語が用いられ評されている。

次に、藤壺である。賢木巻において藤壺は、光源氏との噂が立っては我が子東宮によからぬ事態が生じてくるに違いないと考える。そのため、光源氏から逃れようと堅い決心で出家を表明、実行した。

心強う思し立つさまをのたまひて、果つるほどに、山の座主召して、忌むこと受けたまふべきよしのたまはす。

（賢木　②一三〇）

出家ののちも光源氏と交流はもつが、それはあくまで東宮の後見を務めてもらうためであり、光源氏の懸想からは逃れ続けた。

次に、落葉の宮である。柏木の妻であった落葉の宮は、柏木の死後、夕霧巻において夕霧に言い寄られるが、決して身を許そうとはしない。

心強うもてなしたまへど、はかなう引き寄せたてまつりて、「かばかりたぐひなき心ざしを御覧じ知りて、心やすうもてなしたまへ。御ゆるしあらでは、さらにさらに」といとけざやかに聞こえたまふほど、明け方近うなりにけり。

（夕霧　④四〇九）

立ち込める霧を口実に傍らで一夜を明かす夕霧から脅迫じみた求愛を受けるも、落葉の宮はかたく心を閉ざし、拒み通す。さらに、落葉の宮の母の死後、一条宮に強引に連れ戻し、実事なきまま夫面をする夕霧に対しても、落葉の宮は塗籠に閉じこもって拒絶を通した。しかし、ここまで頑

なに拒んでも、女房の手引きで塗籠に侵入した夕霧に強引に契りを結ばれ、妻の一人となった。

次に、宇治大君である。大君は、亡き父の遺言のとおり独り身を貫き通すつもりでいるため、薫の求愛を拒み続ける。宇治八の宮の喪が明け、薫が姫君たちの部屋に忍び込んだ際も、大君は薫から逃れるべく部屋を脱出する。手引きした老女房が翌朝になって事を知る場面において、大君の行為は次のように評されている。

弁はあなたに参りて、あさましかりける御心強さを聞きあらはして、いとあまり深く、人憎かりけることと、いとほしく思いほれゐたり。（総角　⑤二五五）

その後、薫が匂宮を宇治に連れてきて中の君に引き会わせた夜にも、大君は薫を拒絶し、薫と実事のないままこの世を去った。

最後に、浮舟である。浮舟は、薫と匂宮の間で苦悩し、最終的に入水という行為を選択したことが、侍従の言にて語られる。

「あやしきまで言少なに、おぼおぼとのみものしたまひて、いみじと思すことをも、人にうち出でたまふことは難く、ものづつみをのみしたまひしけにや、のたまひおくこともはべらず。夢にも、かく心強きさまに思しかくらむとは、思ひたまへずなむはべりし」（蜻蛉　⑥二二八）

また、自身による回想においても、この語を用いて語っている。

ただ、我は限りとて身を投げし人ぞかし、いづくに来にたるにかとせめて思ひ出づれば、（中略）行くべき方もまどはれて、帰り入らむも中空にて、心強く、この世に亡せなんと思ひたちしを、……（手習　⑥二九五）

結局浮舟は一命を取り留め、横川の僧都に助けられる。そこで浮舟は仏道に勤しみ、男なき世界に生きようとする。しかし、浮舟の生存はやがて薫の知るところとなり、浮舟への思いを断ち切れない薫は、浮舟の弟である小君を使者に立て文を送る。

「世に知らず心強くおはしますこそ」と、みな言ひあはせて、母屋の際に几帳たてて入れたり。（夢浮橋　⑥三九〇）

人違いだと言い張り小君との対面すら拒む浮舟の態度が、この語をもって評されている。浮舟は薫との愛執の世界に立ち戻ることを拒否し、そのために肉親の情さえも断ち切ろうとしているのである。

六条御息所は、一度は光源氏への愛執の念を断ち旅立ったものの、結局は断ちきることができず、また、落葉の宮は薫への拒絶を成功させられなかった。一方、入水したことで愛執を断ち、薫からも匂宮からも逃れた浮舟、出家に

より光源氏から逃れた藤壺、拒絶を貫き死をもって薫から逃れた宇治大君は、「心強さ」によってそれぞれの意志の貫徹を成功させている。しかし、ここで留意しておきたいのが、彼女たちの行き着く先が、出家もしくは死であることだ。出家あるいは死をもってでしか、拒絶を通すことができなかったのである。また、伊予下向により光源氏から逃れた空蟬は、意志を貫徹させ得たといえるが、空蟬が行き着いた先は都ではなく鄙である。

それに対し、『とりかへばや物語』の女君は、同じく「心強さ」を持つ人物ではあるが、我が子への愛執を断ち、宰相中将から逃れ得た。そして女君の行き着いた先は出家でも死でも鄙でもない。『とりかへばや物語』の女君は、『源氏物語』に見られる女性たちのように、逃避に終わらず、栄華にたどりつく、これまでにない「心強さ」を身につけたのである。

他方、『源氏物語』には、『とりかへばや物語』の女君が我が子への愛執を断ち、子を捨てることを決意した「心強さ」に通底する用例もある。そしてそれは他でもない、光源氏の「心強さ」である。

「聞こえさせまほしきことも、かへすがへす思うたまへながら、ただにむすぼほれはべるほど推しはからせたまへ。いぎたなき人は、見たまへむにつけても、なかなかうき世のがれがたう思うたまへられぬべければ、心強う思ひたまへなして、急ぎまかではべり」と聞こえたまふ。

（須磨　②一六九）

須磨巻において、出立の際、幼き夕霧との別れがたさを振り切るため、光源氏は「心強」く気を取り直して旅立った。これは『とりかへばや物語』女君の、我が子への愛執を断った「心強さ」に共通する。『源氏物語』の男性に見られる愛執の念を断つ「心強さ」はこの一例のみであるが、これは『とりかへばや物語』の女君に摂取されているといえよう。女君の「心強さ」は、光源氏になぞらえられることで、女君の主人公性をも際立たせている。

これまで見てきたように、『源氏物語』では、紫の上に代表されるような、男の訪れをただ待つことしかできず、現状を打破できない女性たちの抑圧された生が描かれてきた。一方『とりかへばや物語』の女君は、「心強さ」を持った行動によって、その抑圧から自らの力で脱出することができたのである。さらに、藤壺や宇治大君、浮舟に代表されるような、男のもとから逃げおおせはするものの、行き着く先は死、あるいは出家という「心強さ」を持つ女性たちとも違う結末をたどる。いずれも「心強さ」を持っている女性ではあるにもかかわらず、このような違いが見られるのは、『とりかへばや物語』の女君がもつ「心強さ」がほかの女性たちとは質を異にするもの、すなわち本来の身体の性とは異なる性別のまま社会に認知され、本来の性

別を隠蔽し続けながら社会生活を送るという、通常では体験することのない経験を通して身につけた「心強さ」であるからだと考えられる。また、この「心強さ」は光源氏がもつ「心強さ」にも通底しており、主人公性までも付与しているのである。ここに、これまでとは違う女性像を描きだしたかった作者の意図を読み取ることができるといえよう。

二　「男に馴らひにし御心」表現の消失と その意味

前章では、「男に馴らひにし御心」及び「心強さ」「心強し」という表現から、これまでとは違う女性像を描きだしたかった『とりかへばや物語』作者の意図を考えてきた。次に、「男に馴らひにし御心」がその後の女君にどのように影響していくのか、それがどのような意味を持つのか見ていく。

宇治から脱出し、女春宮の出産をたすけるために尚侍として宮中に戻った女君は、女春宮の出産後も宮中に留まる。その後女君を見初めた帝に取りこめられ、一身に寵愛を受けるようになった。そして帝の寵愛を独占し、皇子を次々に産んだ女君は、中宮の座にまで昇りつめる。従来の研究では、女君が物語終盤において帝の寵愛を一身に受け、中宮となり、「女の幸せ」を掴んだことも、「男に馴らひにし御心」によるものであるとされてきた。西本寮子氏(8)は、

> 女性時代では、幸福を手に入れる過程が描かれることになる。別の言い方をすれば、獲得した「心強さ」が女性としての幸福の貫徹に生かされていく時代と言えよう。（中略）女姿に戻ってからの今尚侍は、男性時代に身につけた理性的判断力と心強さで我が身を守り、自分の運命を切り開いていったのである。そして彼女が手にする幸福は、はからずも男性時代に秘かに望んでいた女性としての幸福の成就に他ならない。

と解し、三谷亜紀氏(9)は、

> 帝の寵愛を独占し、国母にまで栄達できたのも、女君の、他の女性にはないこの「道〳〵し」さが他の人々を魅了したからだといえよう。（中略）女君が国母にまで栄達できた要因としては、宮の宰相のもとから脱出した心強さに加えて、「道〳〵し」い魅力をも上げることができ、これらはいずれも男装時代の経験によって身につけたものだったのである。

と解している。前章で見てきたように、作者は確かに女君の宇治脱出前後において、「男に馴らひにし御心」を得たことで自らの力で逆境を打破できる、これまでにない女性を描いたといえる。しかし、「男に馴らひにし御心」、及

び類似する表現「心強さ」でもって語られる女君の行動は、女君が男君と入れ替わり、女姿で尚侍として出仕する場面を最後に見られなくなる。女君が順調に女としての栄華を極めたことを、安易に「男に馴らひにし御心」によるものである、と解するのは早計であろう。この表現の消失については、長尾文恵氏(10)の

「心強さ」表現の消失は、「心強さ」という性格的特質が、彼女の女性としての性質の一つとして矛盾・破綻することなく完全に内面化されたことを意味しよう。

とする説がある。しかし、「男にならひにし御心」を得て、これまでにない女性として最高の栄華を掴んだはずの女君の独自性は、物語終盤において描かれることがない。その上、宇治脱出によって「抑圧された女の生」から脱却したはずの女君は、入れ替わり後、その才覚もほとんど発揮することはなく、次章に述べるように、あまりにも従来の「女性の性役割」に忠実である。「男に馴らひにし御心」による自らの力で「抑圧された女の生」を脱出し栄華を極めたはずの女君に、「男に馴らひにし御心」の表現が見られなくなることにはどのような意味があるのか、再考の余地があるのではないだろうか。その意味を、作中で登場人物を形容する際に使用される表現の中で、他の登場人物に比べて特に女君に使用されることが多く、「男に馴らひにし御心」と同様に女君にとって重要な語句であると考えられる「光」の表現から見ていきたい。

女君は、作中で度々「光」を用いて描出される。『とりかへばや物語』における「光」の意味については、對馬和子氏(11)が、

本物語に於ける「光」は「容姿美としての光」と「存在としての光」の二種に大別することができる。（中略）女大将失踪以前の「光」は性的倒錯故の美的優位性という極めて外見的なものを表現していた。そして、女大将失踪後、きょうだいが互いの性を入れ替えつつある時点では、「光」はそれまでの外見的な性的倒錯からくる優位性とは異なる相を呈し、複雑に意味が絡み合いながら、やがて入れ替わり完了後、今大将の復帰を最後に彼らに対しての「光」は姿を消す。

と、長谷川愛氏(12)が、

本物語に於いても「光」は、異装による倒錯的な美とは異質な、その人物が主人公であるがゆえに持つ超越性を表現する語としても使用されており、また、きょうだいの関係性までをも表す語として使用されているのではないか。

と、容姿美、あるいは主人公であるがゆえにもつ超越性を表していると指摘している。『とりかへばや物語』におけ

る「光」に類する語（「光」「光る」「光り出づ」）は十五例である。表現の対象は、女君が七例、男君が三例、宇治若君（女君の第一子）が二例、その他三例と分けられる。以下に女君に対する「光」表現が見られる場面を上げていく。[ ]内は、女君に対して「光」を感じた人物を示した。

一例目は、巻一において、管弦の遊びに出た後、そのまま宿直をしていた女君を宰相中将から見た場面である。

(A)宰相の中将も今宵の御遊びにさぶらひて、いまはただ一方に大殿の姫君の御ことを思ひ焦がれて、例の、かひなくとも、この中納言に恨みも、また世になき容貌けはひも見まほしさにも慰めんと思ひて、まかでたまはずなりぬるを、いづくの隅にはひ隠れて見えぬなるらん、と窺い歩きけるに、この声を聞きまどひ尋ね来てみれば、織物の直衣、指貫に、紅の艶こぼるばかりなるを脱ぎかけて、いとささやかに見ゆれど、若くをかしげにて、月影に光るばかりめでたく見えて、常よりもうちしめりたるもてなし気色、袖濡れわたるに、例染めたるにも似ず世に男の身にめでたく見ゆる

[宰相中将→女君]（巻一　一八九）

左大臣家の姫君（男君）への恋心が叶わぬ慰めに、せめてそのきょうだいである女君を見ようと姿を探していた宰相中将は、女君の声を頼りに見つけ出す。艶のある紅の打ち衣を肩脱ぎにして、若く美しく、月の光に輝くばかりにすばらしく見える女君が、うらやましく、我が身が恥ずかしいほどであると宰相中将は思う。月の光に照らされる女君が、輝いているように見えるのである。

二例目は、女君が初めて吉野の宮と対面する場面である。吉野の宮は、先帝の第三皇子で、渡唐の経験があり、妻を亡くしてからは娘二人と共に吉野山の麓に隠遁している。自身は出家しており、学問、陰陽、天文、夢解き、観相などに優れる人物である。

(B)指貫に、尾花色の象眼の襖に紅の打ちたる脱ぎかけて、光を放ち、はなばなとめでたく、ただ今極楽の迎へありて雲の輿寄せたりともなほとどまりて見まほしき御有様なり。何事もみな口惜しくあせゆく世の末なれどかかる人のものしたまひけるよと驚かれて、とばかりまもりたまふ

[吉野の宮→女君]（巻一　二三七）

初めて対面した女君の姿のあまりのすばらしさに、宮はたった今極楽の迎えが来てもなおしばらくここに留まって見ていたいと考える。時刻は夕方であるため、女君が夕映えに輝いているのが、女君自身が光を放っているように宮には感じられたのである。

三例目は、懐妊の後、これまでの身分を捨てて都から姿をくらまし、宇治の宰相中将邸で出産するという悲壮な決意を人知れず胸にした女君が、正月に何も知らない両親の

もとへ新年の挨拶に行く場面である。

(C)まづ殿に参りたまひて、殿、上、拝したてまつりたまふ。御容貌の光るばかり見ゆること、今年は常よりもいといみじと見たてまつりたまひて、事忌みもえしあへたまはず。

［両親→女君］（巻二　三〇一）

両親は、その才覚を朝廷で十分に発揮し、男性官人として文句のつけようのないほど立派になった男装の娘が、例年にも増してまばゆいばかりに見えることに感涙する。

四例目、及び五例目は、女君が出産のため都から姿を消し、右大将、すなわち女君の失踪に都が騒然とする場面である。

(D)内、院などにも、まして、いみじかりつる世の光の失せぬることを思しめし嘆き、かつは、いかでかさるやうのあらんと、山々寺々、修法読経をはじめ、公私天の下騒がしきまで、世に変はらぬ御様にてたち帰りたまふべき御祈りを世にあまるまでののしるしるし、さりともあるやうあらんと頼もしながら、音なくて日ごろも過ぎゆくままに、世にすぐれたまへりし御様を一目も見聞きたてまつりし人は、恋ひかなしみつつ、野山に交じりて求めたてまつり、世の中に光さすべきかげの雲にまがひなんばかりにくれ惑ひたり。

［世の人々→女君］（巻三　三二八）

帝や院を始め、世の人々は女君を「世の光」「世の中に光さすべきかげ」と評し、右大将がいなくなったことを嘆き、途方に暮れた。女君の存在そのものを「光」としている。

六例目は、女君失踪の事実を知り、男君が嘆く場面である。

(E)幼かりしほどこそ疎々しかりしか、かく離れ出でては、出で入り下り上りにもたち添ひ扱ひたまひしこそ、わが身の光ある心地して頼もしくうれしくおぼえしか

［男君→女君］（巻三　三四〇）

男君は、女君がいるからこそ自分も光っている、言い換えれば、女君が光を放っていると考えている。

七例目は、失踪した女君を捜索していた男君が、宇治にて女姿となった女君を、そうとは知らず偶然垣間見する場面である。

(F)几帳に透きたる人も、見入るれば、紅の織単衣に同じ生絹の袴なるべし、いと悩ましげにてながめ出でて臥したる色あひ、はなばなと光るやうにほひて、額髪のこぼれかかりたるなど絵の描きたるやうにて、いといみじく愛敬づきうつくしき容貌の見まほしき

［男君→女君］（巻三　三四八）

男君は、ひどく大儀そうにぼんやりと横になっている女君の顔色を、女君本人であるとは知らないまま、はなやかに光るようで艶やかであると感じている。

(A)(B)に関しては、女君の容姿美を指している表現でもあるが、むしろ光を感じさせるほどの才覚と美しさを兼ねていることを意味しているだろう。すなわち、(F)は容姿美を、(A)(B)(C)(E)は内面から横溢する女君の才覚を、(D)は女君の存在そのものを指している「光」であるといえる。また、(A)を目にしたとき、当時の読者が真っ先に思い浮かべるのは、『源氏物語』帚木巻にて光源氏と頭中将が左馬頭と藤式部丞を交えて女性評に興じる場面であろう。

白き御衣どものなよよかなるに、直衣ばかりをしどけなく着なしたまひて、紐などもうち捨てて添ひ臥したまへる御灯影いとめでたく、女にて見たてまつらほし

(帚木　①六一)

『とりかへばや物語』の女君も光源氏も、衣服を着崩し、夜の光に照らされている姿を、女性に重ねることを通して高く評される。灯影と月影の違いはあれど、『とりかへばや物語』(A)の場面は、容易に『源氏物語』のこの場面を想起させるだろう。この表現を通して女君は、光源氏という輝かしく才気溢れる主人公と重ね合わされているといえる。このこともまた、女君の「光」表現の意味を補強し得よう。したがって、ここでは長谷川氏の論に従い、「光」は女君の超越的主人公性、言い換えれば女君の横溢する才覚を表していると解したい。

しかし、巻一から度々描出されていた女君に関する「光」表現は、巻三において宇治で女姿に戻った場面を最後に見られなくなり、巻四では一度も使用されることはなかった。宇治での「光」表現の消失に限っては、籠め据えられた生活を余儀なくされたことで、男装時代に遺憾なく発揮されていた女君の才覚が抑圧されたことによるものであると考えられるだろう。しかしそれ以後、宇治での抑圧された生活から脱出したはずの女君にも、その後女性としての栄華を極め中宮となった女君にも、依然として「光」表現は戻ってはこなかった。それどころか、女君の横溢する才覚も鳴りを潜める。このことは、長谷川氏による前掲論文(13)に、

閉塞的な「女」の枠内では女君の性格や才能がもたらす本来の美質は制限され、それに伴い「光」もまた否応なしに女君の奥深くに閉じ込められ、輝きが隠されてしまう。(中略)女君の「光」は、「女」の枠に抑圧されることなく本来の資質を思うままに解放できた「男」としての生き方の中でこそ、その輝きを真に発揮するものであったのだ。

との指摘がある。「光」表現の消失は、女君が女として生き始めたことで、社会が規定する「女」の枠の中に自らを押し込めざるを得なくなり、それゆえに本来の「光」を発揮することができなくなってしまったことの表れであるといえることは長谷川氏の述べる通りであるが、この「光」

表現を用いて女君の特質について考えるとき、「心強し」表現と併せて考えることで、より女君の特質に迫ることができるのではないだろうか。同時に、この「光」表現の消失は、「男に馴らひにし御心」表現の消失を考える上で有効な手がかりである。

かつて女春宮の妊娠と男女きょうだい失踪についての不審を辻褄の合うように見事に説明してみせ、周囲を納得させることで男君との入れ替わりを成功させた女君は、「光」表現が見られなくなった物語終盤において、帝から宰相中将の若君の母親が誰であるのかを問われた場面では、ろくな説明もできないままであった。

「されば、まろ知りたまへることとこそ人々言ふなりしか。げにさまで誰がためもかたはなるまじきほどのことなれば、いとよしや。さは、このことは知りたまはざなり。今ひとつは知りたまへりや。それこそまた知らまほしけれ」と仰せらるるに、聞こえん方なければ、御顔いと赤くなりてうちそむきたまひぬるうつくしげさぞ、類なき。（巻四　五一六）

女君は、女春宮が秘かに出産した男君の第一子についてはしらを切る。しかし宰相中将の第二子、つまり女君が宇治にて出産し、世間には母親が不明とされている宇治若君について、母親が女君であるのではという確信に近い疑念を抱いた帝による追及には、ただ赤面して顔を背けることしかできなかった。そのため帝は、自らの中宮がかつて別の男性と子を成す仲であったことを確信する。「男に馴らひにし御心」を持った才気溢れる女君ならば、機転を利かせて的確かつ慎重に対処できて然るべき局面である。しかし女君は何もできなかった。更には、宰相中将との間に何らかの因縁があったことを帝に悟らせさえしてしまうのである。そこにかつての利発で才気溢れる女君の姿はない。

すなわち、「光」表現の消失からも、女君の横溢する才覚や、稀有な経験によって得たこれまでにない「心強さ」である「男に馴らひにし御心」を発揮することができなくなったことが読み取られるのである。「男に馴らひにし御心」を得たことで、自分の力で自分の未来を切り拓いていける女性として描かれてきた女君は、当時の女性としての最高の栄華を手にしながらも、しかし女君自身の美質を失っていく。ここにあるのは、女性として生きる以上、どんな才覚があっても社会の規定する「女」の枠に押し込められ、抑圧されるしかないのだという、女性の生の限界を認識する作者の眼差しである。

三　女君は「抑圧される女の生」から脱出し得ていたか

前章では、宇治での「抑圧される女の生」から脱した後、

女性として生きるようになった女君から「男に馴らひにし御心」が失われていったことの意味を考えてきた。しかし、そもそも女君は「抑圧される女の生」から逃れ得ていたのだろうか。本章では、女君が宇治脱出によって逃れたかったこと、女君に摂取されている人物、の二つの観点から、女君の「抑圧される女の生」からの脱出が成功したのか否か、また、それらが「男に馴らひにし御心」を得たことで逆境を脱した、新しい「心強さ」を持つ女性を描こうとした作者の意図にどのように影響するのか考えていく。

まず一点目として、女君が宇治脱出により逃れたかったことは何であったか、女君はそれらから逃れられたといえるのかを見ていく。巻三において、出産のためこれまでの身分を捨てて都から失踪し、宇治にある宰相中将の邸に隠遁した女君は、そこで宰相中将の希望により男装を解いて女姿で過ごすようになる。当初はぼんやりと過ごすことが多かった女君だが、二十日ばかりが過ぎる頃には宰相中将との生活にも慣れ、宰相中将をひとえに頼って寄り添いやわらかに振る舞うほどになっていた。しかし都にて女君の妻四の君の懐妊と不貞が世間に露見し、四の君が父右大臣に勘当されたことで、四の君と密通していた張本人である宰相中将は、女君と四の君双方の出産の世話をするため、宇治と都を行き来する生活を送るようになった。

(a)中納言は、忍ぶ方の心苦しさ静心なげにて、またおはしにしかば、ここには月の重なるままに、いとど起きも上がられずつれづれとうちながめつつ、かくてのみあるべきなめり、とる方なくもあるべきかなと見るままに、人は我に劣らず深き方に心を分けて、これに五六日、またかれにさばかりと籠り居たまふ絶え間を、さもならはず、待ちわたり思ひ過ぐさんこそあいなく心尽くしなるべけれ、さりとてもとの有様に返りあらためなどせんことはあるべきことならず、ともかくもたひらかにもしあらば、吉野に参りて尼になりてあらん、と思すを慰めにしたまへる　（巻三　三五二）

女君に劣らず四の君を愛し、都に五、六日、宇治に五、六日と行き来する宰相中将を、そんな経験もないのにこうして待ち続けて思い悩むのは、つまらなく心労の多いことに違いない、と女君は考える。

やがて女君は男児を出産するが、宰相中将は女君が子を捨ててまで宇治を離れていくことはないと見て、出産が迫り体調も崩しがちな都の四の君に付ききりになった。

(b)この頃はこなたがちにのみ添ひゐて、夜、夜中のこともあらんに、遠くたち離れてはとみの有様え聞くまじきにより、宇治へも久しくおはせず。

御文は日にたち返りたち返りおぼつかなからねど、それがうれしかるべきにもあらず。かくのみこそはあるべきなめれ、わが心ひとつにこそよろづのことにつけ

て嘆き絶えせざりしか、大方の世につけてはかたはらなくなりにし身を、あいなくもてしづめて、類なくだにあらず、かくのみ待ち遠に思い過ぐさんことこそ、なほあるべきことにもあらね、右の大臣、世人の言ひ騒ぐほどなほしばし勘じたまふにこそあらめ、世になうかなしくしたまふ御むすめにて、ひたぶるに一方に思ひ許したまはば、あなた強にこそあらめ、我いかなりともその人と知られあらはるべきやうなければ、かかる宇治の橋守に、網代の氷魚のよるのみ数へんほどの心尽くしや、さりとてもとのままに返りなるべきにもあらず、いかにして吉野山に思ひ入りて、後の世をだに思はん、と思ひなるには、この若君の捨てがたく憂き世のほだし強き心地したまふ。（巻三　三六四）

女君は、かつて世間的に見れば並ぶ者のいなかった栄華の我が身をつまらなく沈淪させ、妻が女君一人というわけでさえない男をただ待ち遠しく思って過ごすこのような生活は、やはりすべきではない、と考える。また、今は勘当されているとはいえ、四の君を溺愛している右大臣がもしも宰相中将との結婚を認めたとすると、四の君の立場が強くなり、世間に素性を知られるわけにはいかない女君は、ただひたすら宰相中将の訪れる夜を数えるだけの暮らしになってしまう。そうなればどんなにせつないことか、と女君は考える。

しばらく都の四の君のもとに滞在していた宰相中将は宇治を訪れると、女君に隔てなく四の君の様子や容態を嘆き語った。

(c)例のおはして、さすがに隔てなく、ある有様頼もしげなきことなど憂へたるを、聞くもなかなかなり。さし隔ててことざまにも言ひなさばさてもあるべきに、さはた、え隔てず。（巻三　三六五）

四の君の様子をつぶさに話し聞かせる宰相中将に、女君はたまらない思いを抱き、別の用事で来られなかったように言い訳をすればいいものを、と考える。更にその直後、久々に宇治を訪れた宰相中将がいつものようにしばらく滞在するだろうと思っていると、四の君の出産が近づいたとの報せが入り、四の君と二度と逢わずに死なせてしまったら心残りで悲しいと事情を言い置いて、宰相中将は再び都に戻った。女君は口先では理解を示し、宰相中将を見送る。

(d)あさましくめづらかに思ひし心、我をこそ人に恨みられしかばむつかしく胸やすからぬ思いのあるべきもなかりしものを、かかるさまは憂きものにもありけるかな、かかればこそ仏も罪深きものに思ひおきたまひけれ、右の大臣は常に恨みられ、かの女君も恨めしげなる気色の折々ありし報いにや、我かかる目を同じ人にかへて見つらんなど、来し方行く先なつかしくものも言ふべき人もなければ、押し込めて思ふぞいと苦し

かりける。　（巻三　三六六）

しかし女君は、男装時代には感じたこともなく理解もできなかった嫉妬心や恨みを抱く。そして嫉妬や恨みを感じている状態がつらいものであることを思い知り、宇治での状況を脱出しなければならないという思いを強めていった。

以上見てきた諸場面において、女君は男の通いを待つしかない女性の生活の虚しさや辛さ、嫉妬心を初めて経験し、それらから逃れるために宇治からの脱出を決意する。女君が宇治の生活を通して苦い思いと共に経験したこと、すなわち女君が宇治を脱出することで逃れたかったことを大別すると、次のようになる。

①世間的に見れば並ぶ者のいなかった栄華の身を、このままではつまらなく沈淪させてしまうこと……［b］

②自分に劣らず愛している妻がほかにもいる男を待ち続けて生きていくのは、つまらなく心労の多いことに違いないと考えたこと……［a・b］

③嫉妬心や恨みというものを初めて体験し、つらく思ったこと……［c・d］

このうち、①は中宮となり、少なくとも表面的には栄華を極めたことで、②は帝の寵愛を独占することで逃れることができたといえよう。しかし、③についてはそうとは言い切れない。宇治から脱出し、やがて帝に寵愛され中宮となった女君には、次のような心中思惟が見られる。

ほどなく年月も過ぎかはりて、中宮は二三宮、姫宮などさへ産みたてまつりたまへるを、かかりける人の御宿世と、なべての世にも罪許しきこえて、かたへの御方々もわが身をのみぞ恨みたまふべき。右の大臣の女御は人よりさきに参りたまひて、我はと思したりつるに、こよなき世の気色に、交じらふもはしたなくてまかでたまひにしを聞きたまふも、中宮は、昔、四の君の御ゆかりに大臣に明け暮れ恨みられし報いに、まだ宇治の橋姫にてながめしころ、この御ゆゑ人をつらしと思ひ入りし報いにやとおぼえしに、またかく同じ身のゆゑ、この女御の世を恨みて籠りたまひぬるも、さすがに契りあさからざりけるゆかりながら、かたみにこなたかなた恨み絶ゆまじかりけるも、あはれにおぼゆべかりける仲の契りと、思し知られさせたまふ。

（巻四　五〇九）

年月を経て、帝の寵愛も篤い女君は、帝の子を何人も生み、その地位を確固たるものにしていた。そんな中で女君は、自分が帝の寵愛を独占し中宮となったことで、他の女御が宮中を退出していくことを耳にし、お互いにこちらもあちらも恨みが絶えそうもないことを思う。愛し子を捨てるほどの強い決意でもって決別したはずの嫉妬心や恨みといったしがらみは、帝の寵愛を受けるようになってからも付きまとっており、女君は結局のところ、それらからは完全に

は逃れられていなかったのである。すなわち、女君は宇治を脱出することで逃れたかった「女の身の生きづらさ」から、女性として生きていく以上、完全に逃れられたと断言できはしないといえる。

次に二点目として、男装を解いて女性として生きていくようになった女君に摂取されている人物を考え、それが何を意味するのかを考えていく。前章でも述べたように、男性官人として輝かしく活躍していた女君には、光源氏の摂取が見られた。しかし、女性として生活し始めた女君には、光源氏からの摂取が見られなくなる。一方で、女君には別の三人物からの摂取が感じられるようになる。

一例目は、前章でも引用した、宇治にて男君が女君を垣間見する場面(F)において見られる。この場面にて女君の姿は、「いと悩ましげにてながめ出でて臥したる色あひ、はなばなと光るやうににほひて、額髪のこぼれかかりたるなど絵に描きたるやうにて、いといみじく愛敬づきうつくしき容貌」と評されている。この描写は当時の読者に何を想起させただろうか。おそらく、『源氏物語』の有名な一節、若紫巻における紫の上登場の場面だろう。

つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざしいみじううつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまりたまふ。(中略)幼心地にも、さすがにうちまもりて、伏し目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪つやつやとめでたう見ゆ。

(若紫　①二〇七)

光源氏が初めて紫の上を目にするこの場面と『とりかへばや物語』該当場面とは、垣間見が行われている点、垣間見されている対象の髪がこぼれかかっている点が共通している。厳密に若紫巻の場面が再現されているわけではないものの、紫の上を当時の『とりかへばや物語』読者に意識させるには十分だろう。すなわち、『とりかへばや物語』の女君はこの場面を境に、紫の上と重ね合わされるのである。このことから、女君の役割が、光源氏から紫の上へ転換したことが示唆されていると考えられる。

二例目は、女君が男君と入れ替わり、尚侍として出仕した後、女君を見初めた帝に強引に契りを結ばれる場面に見られる。

男の御様にてびびしくもてすくよけたりしだに、中納言に取り籠められてはえ逃れやりたまはざりしを、まして世の常の女び、情けなくは見えたてまつらじと思すには、いかでかは負けじの御心さへ添ひていとど逃るべうもあらず乱れさせたまふに、せん方なく、恥づかしうわりなくて声も立てつばかり思いたるさまなれど、人目をあながちに憚るべきにもあらず、聞きとがめて寄り来る人ありともいかがはせん、驚かぬ御気色なるに、せん方なし。

(巻四　四四九)

そもそも女君が出仕したのは、男君が妊娠させてしまった女春宮の出産を極秘裏に完遂させるためであった。目的を既に果たしていた女君は、帝に取りこめられる前に、出産後に宮中を退出した女春宮に随伴しなかったことを悔やみ、不安と後悔に泣き崩れる。ここに帝に忍ばれた喜びは見られない。それにもかかわらず、女君は情趣を解さない女として見られたくないあまり、抵抗することもできなかった。この描写は当時の読者に何を想起させただろうか。おそらく、『源氏物語』花宴巻において、朧月夜の君が光源氏に取りこめられる場面であろう。

わびしと思へるものから、情なくこはごはしうは見えじと思へり。酔ひ心地や例ならざりけん、ゆるさむことは口惜しきに、女も若うたをやぎて、強き心も知らぬなるべし、らうたしと見たまふに、ほどなく明けゆけば、心あわたたし。女は、まして、さまざまに思ひ乱れたる気色なり。（花宴　①三五六）

朧月夜の君は東宮への入内が確定的であったにもかかわらず、光源氏に取りこめられ、情趣を解さない無粋な女と見られたくないあまりに流される。『とりかへばや物語』において、帝に取りこめられても抵抗できずにいる女君には、朧月夜の君が摂取されているといえよう。

三例目は、前述した、帝の子を何人も生んでその地位を確固たるものにした女君が、他の女御が宮中を退出していくことを耳にし、お互いにこちらもあちらも恨みが絶えそうもないことを思う場面に見られる。この場面では、女君が寵愛を受けるより以前から入内していた右の大臣の女御が、女君への帝寵が篤く揺らぎそうにないことから、宮中を退出する。その場面の「右の大臣の女御は人よりさきに参りたまひて、我はと思したりつる」という描写は、当時の読者に何を想起させただろうか。おそらく、『源氏物語』紅葉賀の巻における、藤壺の宮が中宮となった際の弘徽殿の女御であろう。

七月にぞ后ゐたまふめりし。源氏の君、宰相になりたまひぬ。帝おりゐさせたまはむの御心づかひ近うなりて、この若宮を坊にと思ひきこえさせたまふに、御後見したまふべき人おはせず、御母方、みな親王たちにて、源氏の公事知りたまふ筋ならねば、母宮をだに動きなきさまにしおきたてまつりて、強りにと思すになむありける。弘徽殿、いとど御心動きたまふ、ことわりなり。（紅葉賀　①三四七）

男皇子を産んだ藤壺の宮が中宮に立ったことで、藤壺の宮が寵愛を受けるより以前から入内していた弘徽殿の女御は、心中穏やかでない。『とりかへばや物語』の右の大臣の女御のように宮中を退出することはないものの、右大臣の娘である点、後から入内した女御に寵愛を奪われた上、その女御が中宮に立つ点は共通しており、当時の『とりか

へばや物語』読者に『源氏物語』弘徽殿の女御を意識させるには十分だろう。そして『とりかへばや物語』の右の大臣の女御が『源氏物語』弘徽殿の女御になぞらえられたことは、自ずと『とりかへばや物語』の女君が『源氏物語』の藤壺の宮になぞらえられたことをも示しているといえる。

女君が、紫の上、朧月夜の君、藤壺の宮に転換されたことは何を意味しているのか。女性としての生を歩み始めた女君が、女性としての栄華を手にし、その栄華を確たるものにしたことを、『源氏物語』の魅力的な女性たちに重ねることでより強く印象づけたと解することもできる。しかしそれは裏を返せば、『とりかへばや物語』女君が紫の上、朧月夜の君、藤壺の宮のような、「抑圧される女」、「流される女」となったことをも同時に意味していることにもなるのである。

紫の上は序章でも述べたように、主体性を持つことをよしとされず、男にすがって生きていくことしかできない女の生の痛ましさを自覚しながらも、その状況を打ち破ることができないままその生を終えた。『とりかへばや物語』女君にその紫の上が重ね合わされたことは、『とりかへばや物語』女君が主体性を持つことをよしとされず、男にすがって生きていくことしかできない女性となってしまったことをも内包していることになるのである。

また、朧月夜の君は「心強さ」を持つ女性とは対極に位置する、「強き心も知らぬ」女性であるといえる。『とりかへばや物語』において帝に取りこめられる場面の女君には、気丈に意志を貫徹させようとする「心強さ」は見られない。そこにあるのは、取りこめられるままに流される、朧月夜の君のような「強き心も知らぬ」女性の姿であり、「男に馴らひにし御心」の面影は見られない。朧月夜の君が摂取されたことで、女君は「強き心も知らぬ」女性への転換がなされたのである。

そして、藤壺は第一章でも述べたように、出家することでしか逆境から逃れ得なかった女性である。すなわち女君は、「心強さ」を持ちながらも、逆境から逃れ得なかった女性に転換されているのである。「男に馴らひにし御心」によってこれまでにない「心強さ」を身につけたはずの女君は、ここにきて従来の「心強さ」を持つ女性に立ち返る。このことは、女君が逆境を逃れ得る力、つまり「男に馴らひにし御心」を失ってしまったことを示しているといえるだろう。

紫の上、朧月夜の君、藤壺の宮になぞらえられたこれらの場面以降、女君に再び光源氏が重ね合わされることはなかった。このことは、宇治から脱出することで女君が「抑圧される女の生」から一見逃れ得たものの、女性として生きることを選んだそれ以降の人生で、「男に馴らひにし御

心」を失い、「抑圧される女の生」を生きることを暗に示していることにもなるのである。

以上、女君が宇治脱出によって逃れたかったこと、女君に摂取されている人物、の二つの観点から見てきた。女君は宇治脱出によって逃れたかった嫉妬心や恨みなどのしがらみから一見逃れてはいたものの、完全には逃れられていなかったといえる。さらに、「男に馴らひにし御心」によって「抑圧される女の生」から脱出したはずの女君は、物語終盤において紫の上、朧月夜の君、藤壺の宮に重ね合わされることで、「抑圧される女」、「流される女」へと転換された。すなわち、『とりかへばや物語』作者は、女君を「抑圧される女の生」から完全には逃れさせることができなかったといえる。性別を偽って生きる稀有な体験によって的確な判断力や類稀な気丈さを手に入れた女君を、「抑圧される女の生」から脱出させることで、作者は「抑圧される女の生」からの女性の解放を物語に託したのだろう。しかし、その解放は成功したとはいえないのである。

では作者は、作り出した「新たな女性」が「抑圧される女の生」から解放された上で栄華を極めることを描き出そうとして失敗したのだろうか、それともその「新たな女性」でさえも、女性として生きる以上は抑圧されるしかないのだという空虚さを意図的に描き出そうとしたのだろうか。前述したように、物語終盤で女君に紫の上、朧月夜の君、藤壺の宮が重ね合わされていることは、女君が魅力的な男性に愛される女性となったことが示されているのだとも、女君が「抑圧される女」、「流される女」に転換されたのだとも捉えることができる。前者であれば、作者は作り出した「新たな女性」を持て余し、その生き方の創造に失敗したといえる。後者であれば、どれだけ優秀で豊富な経験を積んだ人物であっても、女性として生きる以上は抑圧されるしかないという作者の意識が窺える。どちらが作者の本来の意図であるのか言い切ることはできないが、第二章で述べたように、「光」表現の消失、及び「男に馴らひにし御心」表現の消失と時期を同じくして女君が「世の常」の女性となっていったこと、その行動の中に「男に馴らひにし御心」がまったく見られなくなること、そして後述するように、物語終盤において栄華を極めたはずの女君が苦悩に囚われているままであることを鑑みると、作者には、女性が女性として生きる以上、どのようにあっても抑圧からは逃れられないことが意識されていたはずである。

『とりかへばや物語』の終盤において、女君の「栄華」は地の文で語られるのみで、実際の様子は宇治に見捨てた第一子や恨みの絶えそうもない身辺について悩む場面でしか描かれない。女君が「栄華」を極めていながら、物語にはどこか空虚さが流れているのである。そこにあるのは、栄華を極めることがすなわち幸福であるわけではないのだ

という作者の皮肉と、女君に女性としての栄華を極めさせることはできたものの、ついに女君の美質を失わない生き方を描くことができなかった作者の諦念であると捉えることができる。

結

『とりかへばや物語』における女君の「男に馴らひにし御心」が発揮されるのは、男装解除後、宇治脱出の場面と、女春宮妊娠の事情隠蔽の場面である。女君はこの「心強さ」を発揮することによって、男の訪れを待つことしかできず女の身の生きづらさに耐えるしかなかったという従来の「抑圧される女の生」から、自らの力で脱出し得た。また、『とりかへばや物語』の女君と『源氏物語』の「心強さ」を持つ女性たちとを比較することで、『とりかへばや物語』の女君がこれまでの「心強さ」を持つ女性たちと異なる結果を得たことを確認した。『とりかへばや物語』の女君が比較対象の女性たちと異なるのは、その「心強さ」が、稀有な体験を通して身につけた「男に馴らひにし御心」によるものだからこそなのである。『とりかへばや物語』の女君は、当時の物語に見られる「籠め据えられる女性」とも、「出家あるいは死をもってしか逆境を脱し得ない女性」とも異なる、新たな女性像であるといえる。

しかし、女性としての栄華を極めたはずの『とりかへばや物語』の女君には、女性として生き始めて以降、「男に馴らひにし御心」も、男装時代に備わっていた横溢するほどの才覚も描写されなくなっていく。このことは、女君が「世の常」の女性像という枠に押し込められることで、宇治で逃れたかったはずの「抑圧される女の生」に捕らえられていることを示していると考えられる。また、女君が宇治から脱出することで逃れたかった嫉妬心や恨みといったしがらみは、女君が中宮となり栄華を極めてもなお女君に付きまとう。『とりかへばや物語』の女君は、逃れようとしていた「抑圧される女の生」から、そもそも逃れられてはいなかったといえるだろう。

また、物語中盤以降、女性として生き始めた女君には、『源氏物語』の紫の上や朧月夜の君、藤壺の宮からの摂取が見られる。作者は、『源氏物語』において光源氏という魅力的な男性に愛された女性たちを『とりかへばや物語』の女君に重ね合わせることで、女君がより魅力的な女性となったことを描き出そうとしたのかもしれない。しかし、それは女君が「抑圧される女」、「流される女」へ転換されたことをも内包していることになる。「新しい女性」でさえも「抑圧される女の生」からは逃れられないことを作者が意図的に描き出したのか、あるいは作者が「新しい女性」を持て余し、その美質を損なわない生き方の創造に失

敗したのか、どちらであるのかは断定できないものの、「男に馴らひにし御心」表現の消失、「光」表現の消失、物語終盤における女君の「栄華」の空虚さを鑑みると、女性が女性として生きる以上、抑圧されるほかないのだという作者の意識は確かにあったと考えられる。

女君は従来の「抑圧される女の生」から脱却したかに見えたが、結局は逃れきることができたとはいえない。そこには、栄華を極めることがすなわち幸福であるわけではないのだという作者の皮肉と、女性として生きる以上抑圧やしがらみからは逃れ得ないのだという、「抑圧される女の生」に対して反発し新たな糸口を見出したかった作者の諦念がある。そしてそれが物語を照り返し、余計に「女の身の生きづらさ」が意識されるのである。

注

『とりかへばや物語』、『源氏物語』は新編日本古典文学全集より本文を引用し、当該箇所の頁を付した。また、必要により本文に傍線を付した。

(1) 新居和美「『とりかへばや物語』研究――「男にならひにし御心」について――」
(『広島女学院大学国語国文学誌』第三十一号　二〇〇一年)

(2) 西本寮子「『とりかへばや物語』の主人公――女性としての成長を軸として――」
(『国文学攷』第九十八号　一九八三年)

(3) 三谷亜紀「『とりかへばや物語』の女君――『源氏物語』の女性たちと比較して――」
(『広島女学院大学国語国文学誌』第二十七号　一九九七年)

(4) 石埜敬子「『今とりかへばや』――偽装の検討と物語史への定位の試み――」
(『國語と國文学』第八十二巻第五号　二〇〇五年)

(5) 立石和弘「『とりかへばや』の性愛と性自認――セクシュアリティの物語」
(小森潔編『叢書・文化学の越境5　女と男のことばと文学』一九九九年　森話社)

(6) 注(1)に同じ

(7) 角川古語大辞典を参考とした。

(8) 注(2)に同じ

(9) 注(3)に同じ

(10) 長尾文恵「『とりかへばや物語』女中納言論――女性化完成時期の再検討――」
(『花園大学国文学論究』第二十四号　一九九六年)

(11) 對馬和子「『とりかへばや物語』の「光」――異装との関係を中心に――」
(『王朝文学史稿』第二十号　一九九五年)

(12) 長谷川愛「『とりかへばや物語』研究――男装の姫君の物語――」
(『東京女子大学日本文学』第百二号　二〇〇六年)

(13) 注(12)に同じ

(おかだ・かおり　平成二十七年度卒業生)